

国文学研究資料館報

第9号

昭和52年10月

古筆

小松 茂美

古筆ということばは、今日では辞書などにもとられていて、すでに周知のとおりである。が、その正確な定義は普遍化されていない。だいいち、その範囲をどこまで広げるのか、という点でも、まだ一定しない。が、私は平安・鎌倉、さらには室町時代にまで下げ、広げて考えている。ただ、日ごろ扱うものは、平安時代のものが多く、

もともと、古筆ということばは、その字の示すとおり(古人の筆跡)ということである。このことばが、文献の上にはじめてみえるのは、十四世紀である。

たとえば、尊円親王(一一二九—一三五六)が、手習いの眼目を示したことばに、「其筆つかいのやうは、古筆をよく御覧候て……」と、その

著「入木抄」(一卷)に述べている。また、同じ尊円親王が、世尊寺行尹の秘説をうけて成った、「入木口傳抄」(一卷)に、屏風の色紙形の書法を示した項目がある。それによれば、「草ノ假名ト真名ノ字ヲ草ニ書、古筆ノ假名等ノ如也」とみえている。これらが、もつとも古い用例である。が、室町時代になると、このことばは頻繁に使われている。

三條西実隆(一四五五—一五三七)の「実隆公記」などは、その最たるものである。それらは、いずれも上代様の筆跡をさしているのであるが、中には、書にかぎらず、画についても、このことばを使った用例がある。たとえば、花園天皇の日記たる「花園宸記」(正中元年(一一三二—四)十一月十二日條)に、「古筆北野天神

古筆	小松茂美	1
委員・調査員名簿・人事異動		14
電算機化システムと日本語文献		6
田嶋一夫		6
開館写真集		10
国文学研究資料館利用案内		12
文獻資料部事業報告	大久保正	16
研究情報部事業報告	古川清彦	17
大学外、学会・研究会一覽(1)		18
昭和五十二年度秋季学会開催一覽		20

影」とみえるのは、古い菅原道真の画像をさすものである。しかしながら、現代はもっぱら、筆跡についてのみ、古筆と呼んでいる。

ところで、古筆の年代的範囲をどのように限定するか。もともと、古筆が、茶室の懸物として鑑賞され始めたわけであるから、茶人の間では、今日なお、もっぱら平安時代に書かれた筆跡に重点を置いている。が、一枚の断簡が驚くべき高値の市場価値をもつものであつてみれば、たれしもが購架することは至難である。また、明治時代に、傳藤原行成筆「粘葉本朗詠集」(御物)が女子学習院の習字手本に採用されてからというものは、これら一群の上代様の古筆が幅を利かせて来た

今日も假名の手本は平安朝の假名を根底にしており、鎌倉時代以降のものについては、見向きもしない、というのが現状である。書道家の方でも平安朝の名筆に比重をかけすぎる嫌いがあつた。たとえば、書道家の全集や図録は、一様に、平安朝の収録冊数が大半である。が、書の歴史は、時代とともに、動くもの。平安朝は平安朝で、むしろ重要な地位を占める。しかしながら鎌倉時代は鎌倉時代の、室町時代は室町時代の文化の特色を反映しながら、書が変貌を遂げている。これらを正しく見究めるためには、常に視野は平等でなければならぬ。

また、国文学の研究資料としてみた場合に、古筆の価値はさらに倍加する。たとえ、鎌倉、室町時代の書写本の断簡にしても、それが、一枚のみ、いや数葉にすぎない断簡を残す孤本であつた場合には、その資料的価値の貴重性はきわめて高い。という次第で、私は古筆の範囲を室町末期のころにまで下げて考えることにしている。

もともと、わが国における古筆の尊重は、歌道とともに行われて来た。周知のように、古筆といわれるものの内容は、圧倒的に歌集が多い。能書として名だたる人の筆、歌人として著名な人の筆に成るこれらの歌人が、当然ながら、時代ごとに大切に

傳世して来た。たとえば、藤原定家
 へ「一六二―一四一」の書いた本。
 これは、今日、定家本として、喧傳
 されるところであるが、定家の孫の
 時代になると、京極・二條・冷泉の
 三家に分かれる。それぞれが、定家
 の自筆本の相傳をめぐって対立する。
 しかしながら、定家の筆写本が、そ
 れほど無盡蔵に傳世するわけではな
 い。やむなく、それを似せて書く、
 いわゆる「似書」(偽書ではない)が
 発生する。つまりは、模写本である。
 もともと、筆跡を写す場合には、

(1) 臨

(2) 摹

(3) 寫

(4) 写

の字が使われる。(1)臨は、見てうつす。手本を左側に置いて、見ながら、それをうつすのである。写す人の技術の巧拙によって、出来上るものに差がつく。

(2)摹は、かなり丹念にうつすもの。一点一画といえども、入念にうつす。これは、後世(見写し)・(透写し)などと呼んでいる。特に、後者は、原本を下に置いて、薄い紙の上からなぞり写しにするもの。

(3)描は、もっぱら中国でのやり方。「正倉院文書」として傳來する「東大寺献物帳」の中に、正義之の書

が沢山列記されているが、いずれも写しものである。たとえば、「描王羲之……」などの記載がそれである。また、当時の遺品として、「孔侍中帖」(前田育徳会蔵)・「喪乱帖」(御物)があるが、これが、まさしく、この「描本」に当たるもの。まず、字形の外郭を写し、後から墨を塗沫していく方法で、かすれなどの微妙な線までを見事に再現する。わが国では、これに似た方法として、籠字というやり方がある。が、その精妙さにおいては、はるかに劣るものである。

最後の(4)写は、ただ本文を機械的に写す場合について。
 とくで、定家の似書本であるが、ほとんどが、(2)の場合である。やがては、冷泉・二條家の歴代の中には、定家の書体を真似て書く人が出るようになった。書流の上では、これを定家流と呼んでいる。書流は、室町時代に発生し、江戸時代には、五十あまりが派生していたという。かように、古筆の尊重は、書流とも深い関連をもって傳承された。

だが、古筆が尊重される契機は、なんとといっても茶道との深いかわりがあった。茶道のおこりを、ここで説くいとまはない。が、わが国の茶の湯が村田珠光・武野紹鷗を経て、千利休に至りては、完成すること

は、すでに常識である。茶席における中心は、床に懸けるべき書画である。これには、中古から中世に至る建築様式の変遷などについても、承知しておかねばならないのだが。しかし、珠光や紹鷗の時代は、すべて書院造りの建物における茶の湯であった。中国から渡来した、宋・元の名画や禪僧の書が、懸物としてもつとも重んぜられていた。ところが、堺の出身である紹鷗は、上洛すると、まず三條西実隆について、歌道を学んだ。実隆が、最初に紹鷗に与えたのが、藤原定家の「詠歌大概」であった。ここに、紹鷗と定家の結びつきの最初があったのだ。たまたま、

期を同じくして、伊勢国において、定家の小倉色紙百枚が出現した。東常縁は、みずから百枚ながらを傳得していた。ところが、飯尾宗祇がこれを所望して、その半分の五十枚を得た。それが、人々に流布していったのだ。「実隆公記」などの中にも、宗祇が「定家卿色紙形一枚」(同書・延徳二年(一四九〇)三月二十七日條)を実隆に贈った記事がみえる。また、その鑑定の求めに応じたり、あるいは由来書の揮毫を加えた記事がみえる。また、紹鷗がみずから新装成った「定家卿色紙表背絵結構」(同書・享祿二年(一五三〇)十二

月八日條)を見せに来訪したりしている。そして、この色紙が、いわゆる八重葎の小倉色紙として、一躍著名となったものである。かようにして、紹鷗と定家の第二の結びつきが生じたのである。茶席の中に、定家の筆跡を持ちこんだのは、どうやらこの武野紹鷗であったようだ。これについては、片桐石州(一六〇五―一六七三)が「石州三百ヶ條」(一冊)において、注目すべき発言を行っている。

定家の筆の用いる事、詠歌の大概、情以新為先、詞以旧可用と有を、紹鷗是を好、茶道もかくの如く道具は旧きを用、其時節の働にて心を新しくする也とて、小倉の色紙をかけてより、専定家を用る也。

かつて、若き日の紹鷗が実隆から贈与を受けた「詠歌大概」が、かれの茶道観に結びつく契機となった、というのである。これを端緒として、定家の懸物が、茶室の中で幅を利かせることとなる。私は、かつて、十六・十九世紀における定家の筆跡が、どのように茶席で使用されたのか、その全貌をとらえてみた。むろん、ほかの古筆についても、調査は洩らさなかつた。その結果、

1 紀貫之 6 回
 2 小野道風 1 回

- 3 藤原佐理 1回
- 4 藤原行成 3回
- 5 源俊頼 6回
- 6 藤原基俊 1回
- 7 藤原顕輔 1回
- 8 西行 6回
- 9 寂蓮 3回
- 10 藤原俊成 6回
- 11 飛鳥井雅経 2回
- 12 後鳥羽院 5回
- 13 藤原定家 119回
- 14 藤原為家 8回
- 15 冷泉為相 1回

という有様であった(小松著「古筆」昭和四十七年十二月・講談社刊参照)。この数字をみても明らかかなように、定家が圧倒的に人気があったのである。

……肖柏(牡丹花)俊成卿自筆哥懸字、之を持参す。住吉百首の内なり。殊勝なり。殊勝なり。とみえる。注目すべき記載である。実隆は、まず、この朝、晴天であったと記録する。朝まだき、行水を使つて、佛前に勤行をつとめに。中ほどを省略して、最後のくだりが、この部分である。例の連歌師牡丹花肖柏(一四四三―一五二七)が、この日、実隆邸を訪問した。鑑定のために藤原俊成自筆の懸字(懸物・懸軸)を持ち込んだのだ。一見した実隆は、それが俊成の住吉社奉納百首歌の巻物の一部であること、しかも真筆疑いないものと断定した。実隆は、これを見て、殊勝なり、殊勝なりと喜んでいる。また、山科言継の日記「言継卿記」(天文二十一年(一一五五)八月十四日條)にも、それを証する記事がみえる。

○寛辨算師野跡経五行、余(言継)にこれを興える。祝着に候らにおわぬ。

これも、長い日誌が記事を埋めつくしているが、いま、必要な最後の一行分に目をとどめる。

「野跡経五行」という野跡は、権跡(権大納言藤原行成の筆跡)や佐跡(藤原佐理の筆跡)とともに、三跡

と呼ばれる小野道風の筆跡のこと。したがって、野跡経五行というのは、小野道風が書いたと傳稱する写経の断簡五行分、という意味である。言継は、数学の得意な寛辨という僧から、この五行を贈られたというのである。すでに、当時から、かように高名の能書家の書いた書跡を、三五行と切断して鑑賞する、という風習が生まれていたのである。という次第で古筆切の発生は、意外に古いものであった。そして、桃山時代に入ると、俄然、この風習が活潑化する。その一例、奈良の町の塗師屋で茶人を輩出した松屋の代々が書きついだ「松屋会記」によっても、それをさぐるることができる。たとえば、天正十九年(一五九一)の十二月二十三日、同じ奈良の薬種問屋の主人、宗方の家の朝茶に招かれた松屋久政(源二郎・?―一五九八)は、床の懸物について、「定家ゴセンカ、ル」と記しとめている(「松屋会記」)。この懸物は、不思議なことに、「定家ゴセン」の名で、同じく奈良に住む石井宗有(「松屋会記」寛永六年(一一六二九)正月十六日・同七年正月七日條)や、仏師屋侍従(与太郎)(「松屋筆記」寛永八年四月一日條)の許にも保有されていた。かつて、薬屋宗方が所持した「定家ゴセン」という一軸が石井宗有に、そしてかれの手からただちに仏師屋与太郎に轉々と譲り渡された、というのであろうか。

この「定家ゴセン」というのは、《定家の筆である後撰集》という意味なのである。定家の後撰集といえ、紹巴切の名で呼ばれる古筆が現存する。私は、かつて、この切を調査したことがある。後撰集は上下二冊、紙数にしておよそ二四〇枚。古筆切となると、その表裏をめくると、実際には倍数となるのだが、私の眼に止つたのは、今日までに十数枚にすぎない。その紹巴切の中の一軸に、「天正十九年春季(三月)中旬法橋紹巴(花押)」と、年紀と連歌師里村紹巴(一五二四―一六〇二)の自署を加え、紙中極め(表装の本紙中に、鑑定の次第を記すこと)をしたものがある。これは、前述の奈良の町に散在していた「定家ゴセン」の懸物と共通するもの。とすると、これらは、天正十九年に里村紹巴所持の定家の後撰集が切断分割された、ということを示明証することになるのではなからうか。したがって、さきの薬屋宗方・石井宗有・佛師屋与太郎たちは、いずれも分与をうけた人々であったのだ。この紹巴切は、高松宮家に現存する江戸初期の臨写本

によって、天福二年(一一三三)定家七十三歳の筆跡であることが、明らかとなる。これは、たまたま、古筆切が誕生していく過程の一例を示すものとして、すこぶる興味がある。

このように、中世から近世の初期にかけて、人々の筆跡の美に対する切なる憧れによって、こうした切斷が、いくたびとなく繰り返えされて来た。なかんずく、古筆が茶席での鑑賞の対象物として珍重されるようになると、それまで巻物や冊子という形で、大切に保存されて来たものも、惜しげもなく切斷分割され、多数の断簡となつて、より多くの需要に応じていった。こうして、一時に、それこそ兩後の筍も同然に生まれた古筆の切を、系統的に、また、より鑑賞に便利ならしめんがための、工夫が必要であつた。そうして、もつとも効果的な鑑賞形式として考案されたのが、いわゆる古筆手鑑であつた。

手鑑の「手」は、筆跡の意味。たとえば、『源氏物語』の中にも、「手書の上手」(能書家・「梅枝」の巻)とか、「御手もいとめでたし」(手跡が大そう立派である。「若紫」の巻)、「御手の筋をかへつ」(書体を変えながら、「梅枝」の巻)などによつても、その理解が得られよう。また、「鑑」は、むろん、顔を映す鏡のこと。広

雅(釋器)に、「鑑謂之鏡」とみえており、鑑も鏡も同じ意味である。

手鑑というのは、「手跡の龜鑑」というような意味であろうか。この手鑑は、手鏡とも書いていた。鹿苑寺の鳳林承章の日記「隔葉記」(万治元年(一一六五)十二月二十二日、承応三年(一一六四)正月二十五日條)に、「手鏡」の字でみえてくる。また、小堀遠州(一一五七—一六四七)の手紙にも、その書き出しに、「手鏡之事……」という用例がみられる。つまり、当時は、その両方を使つていたようである。が、現在では、もっぱら、手鑑の字を当てている。

手鑑ということばの初見は、やはり中国の文献である。「新唐書」(芸文志)の中に、「王行先律令手鑑二卷」と云えるもの。いまこの本は佚書で、その内容は分らないが、この記録によつて、中国では唐代から、このことばを使つていたことはたしかである。同じく中国の書物で、「龍龕手鑑」という名がみられる。この本は四巻から成る。遼の僧・行均が遍述したものの。字体を明らかにした、一種の字引きである。その序文に、「猶手持於鸞鏡、形容斯鑒、妍醜是分、故名之曰龍龕手鑑」とみえるが、手鑑というものの性格をよく言いあらわしている。この本の明版が、わが国に

もたらされ、早くも当時の識者の眼になじみぶかいものとなつていたことは、事実であり、手鑑という文字の使用も、そうした経緯から生まれたものであろうか。

いつたい厚手の紙を大型の帖に仕立てて、表裏の両面にさまざまな書画を貼り込んで鑑賞するという形式が、いつごろ始まつたのだろうか。むろん、その源流は中国にちがいない。今日、茶懸けとして珍賞される宋元画の中に、丸扇形に切り抜いたものや、小幅のものが少なくない。が、これは、もともと机上に広げてみることでできる程度の大きさの画面であつたことを示している。しかし、それらが、本来、どんな形で装釘されていたのか、となるとはつきりしない。が、おそらく、今日の手鑑のような帖仕立てのものではなかつたろうか。日本においては、この形のもの、桃山時代には、すでに好事家の間に行われていたらしいことが推測される。というのは、今日、御物として傳えられる「桂宮本万葉集」(一卷)を収めた、外箱の蓋の裏の記録が、その間の消息の片鱗を伝えるからである。

此「幅、芳春院(加賀大納言家室)年来所持。紀貫之有自筆奥書。而、関白秀次公依御所望、入見参之處、截端与

奥書被押手鑑云々、

字行を追うだけでも、容易に意味を汲みとることはできるであろう。この一軸は、芳春院(加賀大納言前田利家の室)が年来、所持していたものであつた。紀貫之自筆の奥書がある。そこで、関白豊臣秀次が所望したので、それを見せた。ところが、懸望によつて、巻頭と巻末の奥書の部分を切つて献上した。秀次は、みずからの手鑑に、それを貼つた、という。秀次といへば、東寺の空海筆「風信帖」(一卷)の一通を召し上げたことで有名。古筆マニアであつたかれは、こうして、つきつきに古筆を集めては、手鑑に貼つていったのだ。手鑑製作のはしりは、どうやらこの秀次あたりではなかつたろうか。寛永時代に入ると手鑑づくりが、一大流行を遂げるようになる。たとへば、「隔葉記」(明曆三年(一一六七)五月十二日、同十六日條)の記載によると、後西天皇の宮廷で大がかりな手鑑づくりが始まつたことを報じている。鹿苑寺の住職たる鳳林和尚も、それに一役を買わされた。日記の記載を眼で追つていくと、「御手鑑、近比被「相押」故」に、「五山詩僧新古共名不知」有之、相考、信次書付」などを書いてさし出すべき下命をうけている。雲霞のごとき五山の

衆僧たちについては、いちいちその名をたしかめることができなかつた様子。だから、鳳林和尚が宮廷に呼び出されて、五山僧の古筆の切について、その筆者名や僧位などについて、下問をうけた次第が知られる。手鑑が完成したのは、越えて明くる年。師走も迫る二十二日のことであつた。

一年半も費しての、この大がかりな手鑑づくりは、単なる一冊ものではなく、じつに「拾六冊」(「隔葉記」万治元年(一六五八)十二月二十二日條)もの大部のものであつた。このころになると上も下も、世の中はあけて手鑑づくりに熱中するようになる。つまりは、手鑑による筆跡の鑑賞が大流行をつくり出したのである。たとえば、元和から寛永初年ごろにかけて刊行されたとみられる假名字の「つぎのふはけふの物語」(二卷)の中にも、「今ほど世間にかがみかやはやる。色々さまざまの古筆をあつめてほんそうする中にも……」という記述がみられる。が、これは、あたかも前述の手鑑の盛行とまったく一致するのである。また、井原西鶴(一六四二〜一六九三)の「好色一代男」(八冊・天和二年(一六八二)十月刊)には、「了佐極の手鑑」という記事がみえる。この了佐

極めというのには、当時、古筆鑑定にかけて第一人者であつた、古筆了佐(一五七二〜一六六二)の鑑定した手鑑という意味。かように、手鑑づくりの波は、ひとり宮廷や公卿・大名社会にとどまらず、すでに富裕な町衆の間にも押しよせていたのである。

当時のその様子を推知するに、なにより恰好な材料がある。ほかでもない、「慶安御手鑑」と呼ばれる、大形木版刷りの手鑑そのものの複製本である。慶安四年(一六五一)の八月、京の二條御幸町なる五倫書屋という本屋が板元である。私の調査によれば、六種の版本がある。収める古筆切の数は、一三六葉。まず、巻頭に聖武天皇の御筆と傳える「大聖武」(「賢慈経」の断簡)から始まる。いまの手鑑の形式とほとんど、変るところではない。

かように、手鑑の製作が活潑になつて、その貼り方や順序などに、一定の形式がつくられるようになった。江戸中期のころ、笠原祥雨という鑑定家があつた。かれは、みずから案出して、「手鑑行列」(一巻)という本をつくつた。その跋文によれば、手かゞみ行列之事、むかしより定りたる様式もなく、面々の作意了簡を以て、前後をなせり。勅筆を頭にしつ、高家・高官をさきとする

あり。又、時代の古新にまかせて古をするあり。高位を先にする時は、貫之・道風の類、官浅きゆへ、列に後れ、時代を以すれば遣違院(三條西実隆)や称名院(同公條)等、近代たる故に末になる也。因、茲令序次をなす事、勅筆、親王家及攝家、清家とつゞけ、其次に名人の部をたて、貫之并三跡の類を初め、時代、官位にか、はらず有職、歌道、智徳、名譽拔群の人を準たり。次に世尊寺家は入木道之棟梁たる故也。次に大臣家を先として、諸卿を列す。其末に至て、歌道の好人、又、儒医・茶人・能書等并唐筆を出す。

裏は聖徳太子を最初として経切の類を次第せり。其次に法門主、次に二條、冷泉家、次に女筆、武家及神官等、次に諸中并連歌師等也。……(以下略)

と記している。おのれの才量によつて、手鑑貼り込みのための、一定の配列を考案したのである。この文章によれば、勅筆・親王にはじまり、整然と二十二分類に大別けを立てているのである。この本は古筆分類に先鞭をつけるものであつた。ついで、「古筆千筆」(一冊・国立国会図書館蔵)、「古筆惣巻」(二巻一冊・同上)などの類書が生まれた。あるいは、「古筆

切目安」・「古筆切名物」(一冊・小松藏)など、いずれもこの方則にのつとりながら、筆者別の古筆切を編集したもので、しだいに手鑑の配列順序が系統化されていった。すなわち、手鑑の表の側は、まず巻頭から聖武天皇・光明皇后にはじまる天皇・皇后・親王から藤原道長・藤原忠通・後京極良経あたりの攝関家、紀貫之をはじめとする三跡ら能書家、藤原公任、源俊賴・藤原基俊らの歌人、西行・寂蓮・慈円の歌僧の筆跡類を。

また、裏面には聖徳太子・藤原鎌足・菅原道真らにはじまつて、空海以下の僧侶、小大君・大貳三位(紫式部娘・民部卿局(藤原定家娘)・阿佛尼(藤原為家室)ら女流歌人、源頼朝・北條時頼らの武將、宗祇・宗長・東常縁ら連歌師たちの筆跡というように、それぞれ特定の階級グループごとに、組み合わせが立てられているのである。

もともと、古筆の鑑定は既述のように、三條西実隆などのように、能書の貴族がこれを行つて来た。あるいは、遠く藤原行成が公任の依頼によつて、道風の假本本の鑑定をしている。また、伏見天皇・尊円親王などは、いずれも具眼の士として、数々の鑑識語を残した遺品が傳えられている。ところが、江戸初期に入

り、古筆の鑑賞熱が高まると、専従の古筆鑑定者の必要が生じて来る。古筆家の創立が、それである。その経緯については、さきの「慶安御手鑑」の序に、

ここに了佐居士、自然、古筆を見習。及ばぬ所は烏丸大納言光広卿に尋ね伺う……一年、東にくんだり御手鑑拝覧いたし、古筆といへる名の家をくだし給ふと也。

とある。つまり、了佐が光広について、古筆鑑定の術を学んだという。しかも、了佐は、古筆の姓と「琴山」号の鑑定所用の印をうけて、古筆鑑定を業とすることとなった。この古筆家は、その了佐を初代として、本家、別家に分派するが、本家の方は、昭和十年代に没した古筆了信に至るまで、じつに十三代を世襲したのである。が、これらの鑑定は、歴代が、もっぱらそれぞれの勤に頼ってやってきたものであるから、いまみると不合理なものが多い。

たとえば、古今集最古の写本である高野切古今集は、現在では明らかに三人の筆跡と判別される。が、古筆家の鑑定では、いずれも紀貫之一人の筆と鑑定されている。

しかしながら、今日では古筆の研究方法が、極度に進んだ。もつとも信頼すべき当人の真跡が、いくつも

発見されて来た。それを基準としながら、写真による綿密な比較研究が容易となった。私は、これら一群の古筆に対して、新たに古筆学なる学問の体系化を考えている。古筆そのものが国文学・国語学・美術史・書道史などの基礎資料として、貴重であることはいうまでもない。もと一卷の巻物、あるいは一冊の冊子であったものが、切断の憂き目にあつて、一枚、一枚の断簡として散在する。たつた、一枚の断簡しか傳えられない古筆もある。たとえば、紫式部によつて書かれた「源氏物語」は「源氏物語絵巻」(徳川黎明会・五島美術館蔵)が、その最古の本文を傳えるもの。十二世紀半ばすぎの書写である。紫式部の生存年代から二世紀もおくれる。あるいは、定家の書いた「青表紙本源氏物語」は、数冊の筆写本を残すにすぎない。が、これらに至る間に、「源氏物語」が書写されないはずはない。もしも、その空間を埋める平安時代の「源氏物語」の写本が、たつた一枚の断簡にしても、発見されたとする。それは、たとえようもなく大きな存在価値を示すであらう。

そうしたものが、手鑑の中に潜む可能性があるのだ。現在、古筆手鑑は、全国の美術館・社寺・個人など

合わせて、約三十種のものがある。しかしながら、新発見がないとはいえない。現に、「源氏物語絵巻」の詞書の断簡が、戦後の三十年間に、「若紫」・「螢」・「乙女」などの断簡を、いずれも新出の手鑑の中に発見したのである。また、現存の確認される手鑑も、徹底的な調査研究が完了しているとはいえないのだ。これらの調査によつて、新資料が次々に確認される可能性も大きいはず。

ところで、これら(筆者名を明らかにしない古筆に、文献学的方法ならびに科学的方法を併用しながら、筆

者名を明らかにするのが、古筆学)である。科学的方法といっても、たとえば、光学機械をフルに応用しながら、拡大写真などによつて、筆法の個性をさぐる必要もある。また、紙面と執筆角度の究明による、筆者個性の追求も可能。また、和紙の繊維の拡大写真による比較研究によつて、時代の把握も必要。また紫外線照射などによつて、故意の加筆や真偽の判別も必要であろう。というように、古筆学の方法が占める地位は、図り知れない大きなものがあるのである。

(東京国立博物館美術課長)

電算機化システムと日本語文献

海外出張報告

田嶋 一夫

昨年十二月末より二カ月間、主に米英両国に出張し、図書館におけるコンピュータ利用と情報サービス、日本語文献取扱いの現状、日本文学研究の現状について管見してきたので、その概要を紹介する。主な訪問先と面会者は表1のとおりであるが、

日本文学の資料の所在状況、研究状況の調査目的では、すでに当館から古川部長、松田、福田尚教授が出てきていることもあつて、当館として未だコンタクトを持っていない機関を多く訪ねた。

以下項目別にメモしておきたいと思う。

表1

訪 門 先	主 心 面 会 者
1) Hawaii University(Honolulu) Library East Asia Collection Dept. of East Asian Literature	Dr. Stanley West(Librarian) Mrs. Minako Song Prof. James T. Araki(Director)
2) Centralized Processing Center (Dept. of Education) (Honolulu)	Mr. Tadashi Akiyama(Director) Mrs. Caroline Masutani (Cataloging Head)
3) University of Washington(Seattle)- East Asia Library Dept. of Asian Languages & Literature	Mr. Karl Lo(Head) Mrs. Teruko K. Chin Prof. Roy Andrew Miller (Chairman)
4) Stanford University(Stanford) Library East Asian Collection Dept. of Asian Languages	Mr. Allan B. Veaner Ms. Emiko M. Moffitt(Deputy Curator) Prof. Makoto Ueda
5) Ohio State University(Columbus) Library Mechanized Information Center	Mrs. Ichiko Morita(Que section) Mr. Bernard Bayer(Head)
6) Ohio College Library Center (Columbus)	Mr. Philips Schieber(Editor)
7) National Federation of Abstracting & Indexing Services (Philadelphia)	Ms. Toni Carbo Bearman (Executive Director)
8) Library of Congress(Washington D. C) Japanese Section MARC Development office MARC Editorial Division	Mr. Andrew Y. Kuroda(Head) Mr. Key Kobayashi(Assisitant Head) Mr. James Agenbroad Ms. Maumi Taniguchi(Head)
9) Yale University(New Haven) Library Development Office East Asian Collection Dept. of East Asian Languages and Literature	Ms. Sandra Stone Mr. Hideo Kaneko(Curator) Prof. Edwin McClellan(Chaireman) Prof. Stanley Weinstein
10) Columbia University(New York) East Asian Library Dept. of East Asian Languages	Ms. Miwa Kai(Head) Prof. Donald Keene Prof. Ichiro Shirato Prof. Barbara Ruch (University of Pennsylvania)
11) London University(London) Library School of Oriental & African Studies	Miss. Linda Rodgers Mr. B. C. Bloomfield(Librarian) Mr. Brian Hickman (Librarian) Prof.P.G.O'Neil, Prof. Eimei INOUE
12) British Library(London) Dept. Oriental Manuscripts & Printed Books B.L.Bibliographic Service Division	Mr. K. B. Gardner(Keeper) Mr. D. G. Chibbett(Assistant Keeper) Mr. Mike White
13) Sutton Libraries(London) (Educational Department)	Mr. J. P. McEachen(Technical Services Officer)
14) Sheffield University(Sheffield) Library Center of Japanese Studies Library	Dr. P. Clinging Mr. G. H. Healey(Lecturer) Miss. Yoko Ujiie Miss. Taeko Terashima

(一) 図書館業務の電算化システムについて、これについてはふれるべきことが多いので、詳細は別に報告することにして、項目だけあげておく。
ハワイ州政府のCentralized Processing Centerの活動、スタンフォード大学(SBALLOTS (Bibliographic Automation of Large Library Operations Using a Time-Sharing System)を、OCLCでは、全体の作業の流れ、システムの膨張とそ

の問題点、参加館の格差の問題等、オハイオ州大では、OCLCを利用して行っている目録作成の実際とそこの問題点、MICの活用状況、議会図書館では、MARC Development Office及びMARC Editorial Division(Name Authority Data Preparation and Verification Section 及び Japanese Section)でMARC関連の諸問題、日本語文献の機械処理上の問題等につき、見学と説明を受け、また意見を交換した。

ここで最も強い印象は、アメリカ図書館界におけるMARCのもつ意味の大きさである。イギリスでは、大英図書館で、BNB system, Locas(Local Catalogue System), BLAISE (British Library Automated Information Service), MARLIN(Machine Readable Libraries Information)等の概略と構想を、サントライブラリーでは、総合的なコンピュータ処理について、ロンドン大では、Union List of serialsシ

ステムについて、シェーフィールド大学では、閲覧管理システム及び目録作成の電算機化計画について、等々の見学を行った。
〔二〕情報検索サービスについて
図書館内に端末を設置して情報検索サービスを行っている例として、ワシントン大、オハイオ州大の例を見た。前者は端末が一台置かれていて、各種のデータベースが利用できるとの説明であったが、利用形態は単純でSDIサービス等は行っておらず、活潑なものではなかった。全体で月五〇件位利用されているとのことであった。後者では、Mechanized Information Centerが図書館組織の中に作られており、本格的に活動している。サービス範囲も広く、科学、社会科学、教育、農学、化学、心理学に亘っており、サービス形態もSDI、溯及検索とある。七十六年十月の統計を見ると、科学の場合、一、八一七名のユーザーが、一八九六のプロフィールを登録し、七、五九六件の書誌情報を得ている。ユーザーは、プロフィールの中から自分の必要とするものをリストアップし、図書館に電話で注文する方式である。データベースは、購入又は借用がほとんどである。九名の専任職員がお

り、その構成はディレクター一名、ライブラリアン四名、プログラマー二名、バンチャー一名、秘書一名となっている(他に五名の学生職員)。(三)、日本語文献の整理についてこれについては、主にハワイ大学、ワシントン大学、スタンフォード大学、シェーフィールド大学等で調査し、関係者と意見をかわした。ハワイ大学はNPAC (National Program for Acquisitions and Cataloging)より目録カードの配布を受け、基本的にはこのカードの複製から目録カードを作成している。これら約七〇%の目録が可能で、ここから出ないものは、カリフォルニア大(バークレー)の冊子目録、フーバー研究所の冊子目録を利用し(これで一〇~二〇%の目録可能)、最後に残った一〇~二〇%を独自に目録する。また写本、版本については、「国書総目録」が利用されている。ワシントン大学もほぼ同じ状況である。スタンフォード大学でもほぼ同じ状況である。LCカードを待つてそれを利用し、JCカードのない場合は、一~二年後もう一度JCカードを請求し、ここでなかった段階ではじめて、NDC(第六版)により、独自に目録化するということであった。こ

の他にもアメリカではほぼ同じようであったが、強く感ずる点は、この図書館でもオリジナル・カタログを減らす方向にあることである。このことは、専門職員を減らして目録作業に要する経費を節約しようとしているものと思われる。(当然ここに機械化システム、OCLC、BIBLIS等のネットワークへの加盟、目録の共同作成システム等が関係してくるが、日本語文献の整理はここには関係していない。またNPACは、過去四年間に刊行されたものに限るとか、翻訳、逐刊、版はサポートしない等の制約はあるが、良く利用されている) 英国のシェーフィールド大日本研究センター図書館では、シーフカタログが使われている。その工程は、(1)前作業(プレカタログシートへの記入)(2)カタログイング(主図書館からくるシーフカタログシートへの漢字ふりあて)(3)ファイリングとなっている。このシーフカタログは、ソーティング、メインテナンスに著るしく不便であり、きわめて原始的な方法と言える。しかも司書は一人(補助者もなし)である。一人で圖書の選択、発注、閲覧、レファレンス、逐刊の整理等まで行っている。

組織的にも大きな問題がある。さらに英国ではジャバンライブラリーグループとして、大英図書館、オックスフォード大、ケンブリッジ大、ロンドン大、シェーフィールド大の五館の関係者(ガードナー氏、ヒックマン氏、寺島妙子氏等)が、月例の会合を持ち、購入圖書の調整を行い、社会科学図書については、全面的にシェーフィールド大が責任を持っているという。大変重大な問題と思うのであえて記しておく。

四、日本文学の研究状況と研究者組織
主としてJ・荒木教授(ハワイ大)、M・上田教授(スタンフォード大)、J・森田教授(オハイオ大)エドウィン・マクレラン教授(イェール大)等の方々との話しを総合してみると、全米の中で日本文学のリサーチセンターとしての役割を果しているのは、二〇位の大学があり、研究者も百名位が数えられそうである。私の訪れたところは、いづれも日本文学のスタッフ三~四名を擁し、図書も十数万冊に近いものを有し、基本的資料は良く整備されていたと言える。アジア学会(Association for Asian Studies)の総会でもパネルの一~二が日本文学にあてられ、数件の研究発表がある。しかし全米約一八〇〇の大学の

中の二十大学とは、まだまだ細かいものと言えるだろう。ある人は、日本におけるアフリカ文学研究にたとえたし、またある人は、東洋哲学研究にたとえた。オハイオ州立大で、日本語が、あまり教えられない言語の中に入っていると聞いたとき、この感を深くした。なお、研究者の組織としては、表IIのものが主なものと思われる。

(五)、その他

以上項目別に印象を綴った関係でいくつか重要な点がもれてしまつたが、その中の一つであるイェール大で調査したResearch Library Groupのことについて触れておきたい。これはイェール大、ハーバード大、コロンビア大、ニューヨーク市立図書館の四館で構成している。大きな図書館でも十分な予算はとれない、出版物は高く、備えるべきものは多い、逐刊物の有効利用を図るには、と言った問題点から結成され、現在は各館での図書購入の調整、逐刊物のコンピュータ処理を行っている。将来はオンライン目録作成を構想しようと言つ。最近Mr. James Shipper(カリフォルニア大、コネチカット大の館長、Association of Research Library's プレジデント

表II

名 称	刊 行 物
Association for Asian Studies The University of Michigan Ann Arbor, Michigan 48109	Asian Studies Newsletter The Journal of Asian Studies Bibliography of Asian Studies
The Association of Teachers of Japanese	Journal of the Association of Teachers of Japanese
Modern Language Association	
British Association for Japanese Studies President, Mr. Richard Story Far East Center St. Antony's College, Oxford, U. K.	
European Association for Japanese Studies	

を歴任)をアレジデントに据えた。OCLCをはじめ、さまざまなくれたネットワーク組織がある中で、あえて独自のシステムを作ろうとしていること、アメリカの大学図書館の中でも代表的な大規模図書館と、公共図書館としての最大のもので構成されていること、などからして今後大いに注目すべきであると思う。

(六) おわりに

私にとって日本文学の研究の現状を見、研究者の要求を把握し、図書館における電算化システムを見学するという、一見結びつかないようなテーマで米英をまわったのは、我々の作成するデータベースが、海外での位利用される可能性があるかを知りたいためであった。そのために積極的に研究者、図書館の人双方に館のプランも話した。その結果、研究者の側からは、論文検索システムに対する期待が大きかった。

また、漢字システムについては、予想外の反響で各地で熱心な質問を受けた。なかでもMr. Kai Lo(盧国邦氏、ワシントン大学東アジア図書館のヘッド)は、漢字文献のローマ字化によるコンピュータ処理を研究していたが、漢字システムの研究をしたいと語っていた。Mr. Allan Veaner (BALLOTSの中心人物、スタンフォード大)氏も、後で人づてに伝え聞いたことであるが、漢字システム研究の必要性を述べられた。これらのことから、私は、アメリカにおいて日文学の研究は確かに少数ではあっても、中国学さらに非ローマ字言語の問題も加えるならば、決して少数ではないという事実をあらためて認識した。

新収資料紹介⑦

最後に、私のとほしい語学力にもかかわらず、予想外の成果を得て無事帰国できたことを感謝したい。殊にハワイでの荒木教授、Mrs. SongスタンフォードでのMr. A. Veaner、Mrs. E. Moffitt記録的な厳寒に見舞われたオハイオ州での森田様御夫妻、

今井似閑 書置之事

今井似閑(一六五七—一七二三)は、近世初期の国文学者で、和漢典籍の集書家として聞えている。契沖阿闍梨の高弟であった。

そのコレクションは京都市上賀茂神社の三手文庫、山口県立図書館の二つに分かれるが、学者の眼による選択だけあって、平均のとれた良質のものが多い。なぜ似閑がこのような文事を行ないえたのか、それには、王城の地京都代々の両替商大黒屋の富が大いにあずかって力があつたことが考えられる。

彼の集書の半ばが、山口県立図書館にあることも、大黒屋が長州藩出入の御用達であったことを思えば、何の奇もないことであつた。

この一巻は、巻首に「書置之事」と墨書された自筆の遺言状で、死去二年前の一七二一年に書かれたもの、時に似閑は六十五歳であつた。

ワシントンでの黒田氏、長尾氏、イール大での金子氏、一の瀬さん、シェーフィールドでの氏家さん、これらの方々にはひとかたならずお世話になった。深く感謝する。また出発に先立ち種々御教示賜った松村多美子教授にも厚く御礼申しあげる。

宛名は善四郎・お俊・太郎右衛門となつているが、単なる遺産分配ではなく、彼らの身の取置の些事に到るまで一々詳細に指示しており、長兄・次兄の頃から傾きかけた家運を壮年期の精勵によって挽回した似閑の大黒屋系家長・族長としての一面がうかがえて興味深い。いうならばこの書置は、近世初中期の町人家訓書の系列に属するものである。配慮は委曲を尽しているにもかかわらず、文中、蔵書はもとより古典に関する記事がほとんど見えないことは注目に値する。

この書置の日づけは九月八日であるが先立つこと二ヶ月、七月二十日、三手文庫を奉納している。命終の近きことを覚悟して、文事俗事ともにまきりをつけたというならば死支度であつた。

(松田 修)

写真集



①



④

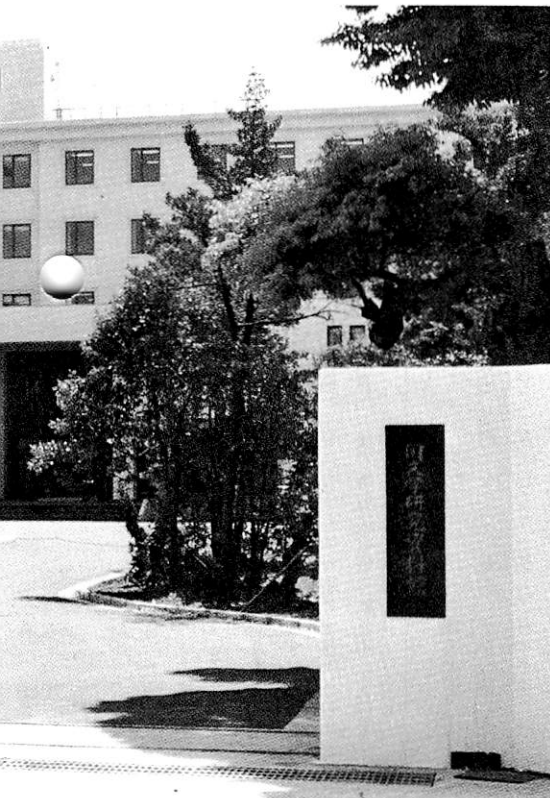


②



③

- ① 開館式における館長あいさつ
- ② 特別展示を見る海部文部大臣
- ③ 館祝賀パーティー
- ④ 新会議室における評議員会議



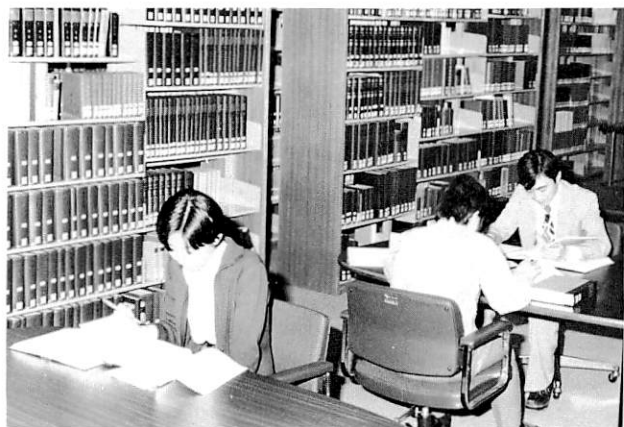
⑥



⑦



⑧



⑨



⑤

③ 国文学研究資料館正門
 における調査員会議
 ④ 閲覧室受付
 ⑧ 閲覧室（四十七席）
 ⑨ 開架参考室（十六席）



国文学研究資料館 資料利用案内

閲覧時間 9時30分～16時30分

ただし複写受付は、平日は16時に、土曜日は11時に締切ります。

また参考開架閲覧室において、土曜日の午後は、参考図書を開覧することはできませんが、参考質問は受付けていません。

閲覧業務、参考業務は次の日には行いません。

- 1、日曜・祝日、振替休日
- 2、毎月末日(その日が1にあたるときは前日) 4月末日が1にあたるときは28日)
- 3、創立記念日 5月1日
- 4、年末年始 12月27日～1月5日
- 5、蔵書点検期間 3月25日～3月31日 そのほか燻蒸のために臨時に休むことがあります。

利用者

- 1 大学の教員
- 2 調査研究機関の研究者
- 3 大学院生
- 4 大学生

5、その他館長が適当と認める者

国立大学共同利用機関であるという点で、若干の資格制限はありますが、基本的には国文学研究のために当館の資料を利用しようとする人すべてに開かれている機関です。

初めて来館した利用者は、カウンターで登録手続をして入室証の交付を受けてください。

入室に際してはその入室証を提示して閲覧者記章を受けとってください。

持込み図書がある場合は、カウンターに申し出て、1冊につき1枚の図書持込票を受けとり、それを本にはさんでください。

マイクロ資料

検索のツールとしては、電子計算機を使って作成した、冊子体の「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録」があります。

ポジフィルムは、カウンターに閲覧請求票を提出して請求し、閲覧室南側のリーダーで閲覧してください。「マイクロ資料目録」のフィルム種

別の欄にCと表示されている資料については、紙焼写真本が作成されており、閲覧室に開架してあるので、自由に手にとって閲覧することができます。

図書

閲覧室入口にあるカード体の目録によって、書名あるいは著者名から検索し、閲覧請求票をカウンターに提出して請求してください。

特別別置資料(貴重書、特別コレクション)・寄託資料の閲覧を希望する場合は、閲覧許可願に所要記項事を記入して提出し、許可を受けることが必要です。

辞典・事典・書誌・索引・校本等の参考図書は3階の参考開架閲覧室に開架してありますので、自由に手にとって閲覧することができます。

逐次刊行物

学術雑誌・紀要類の当館における所蔵は、電子計算機を使って作成した、冊子体の「国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録」によって知ることができます。

主要な雑誌の最近号それぞれ数冊は、閲覧室の学術雑誌コーナーに開架してあります。バックナンバーはカウンターに閲覧請求票を提出して請求してください

複写

資料の種別に応じた次のような複写サービスを行っています。

1、マイクロ資料

- (a) ポジフィルム複製 1コマ 10円 (基本料金 1件につき100円)
- (b) 紙焼写真複製 A5判 1枚 60円 (基本料金 1件につき100円)
- (c) リーダープリンターによるコピー 1枚 45円
- (d) 紙焼写真本の電子複写 1枚 45円

ただし原資料所蔵者の許可のないものは複写できません。

- また(a)、(b)は作製に2週間から3週間の日数がかかります。
- 2、図書(洋装本)・逐次刊行物 電子複写 1枚 45円
- 3、図書(和装本) 撮影によるネガフィルム作製 1コマ 30円 (基本料金 1件につき100円)

ネガフィルムからの複製は、マイクロ資料の複写と同様です。

貸出

原資料所蔵者の許可のあるもの限り、紙焼写真本だけ貸出ができます

す。

貸出するときはカウンターに貸出請求票を提出してください。

貸出期間は9時30分から翌日の12時までです。

参考調査

文書・口頭・電話等による参考質問を受付けています。

参考調査の範囲は、原則として、参考文献の紹介と所在調査までです。

また学術研究の目的に沿わない質問は受け付けません。

相互利用

所属機関の図書館等を経由して、文書で、複写と貸出の申込みをすることが出来ます。

複写は複写の条項と同様です。

貸出できる資料は次の2種類です。

1、図書

ただし特別別置資料・寄託資料・参考図書・その他館長が不適当と認めたものは除きます。

2、紙焼写真本

ただし原資料所蔵者の許可のないものは除きます。

貸出期間は31日間です。

複写・貸出とも、送料は申込者の負担になります。

貸付

教育・学術・文化に係る展示用に限り、資料の貸付を認めることがあります。

貸付を希望する場合は、物品借受申請書をはじめとして所定の書類をととのえて、承認を受ける必要があります。

また展示期間は3週間を超えることはできません。



主な来館者

開館以来多数の方々ご利用・見学のため来館されており、次の方々が海外からも来館されました。
金子英生

- (イェール大学図書館東亜部長) アンソニー・ファリントン
- (英国インド事務所副館長) ハワード・S・ヒベット
- (ハーバード大学教授)

新収資料紹介⑧

市左衛門宛賀茂真淵書簡

尚々五社へ祝儀之書状遣候。治兵衛へ印状も遣候。いば次郎兵衛へも遣候。脇ぎたにるの聞は神田門之外のはかし不申候。いまた何処ともしれ不申候。こまり申候。以上。

一炭大分入申候にあしく候てこまり申候。可成事に候は、冬中二又へ御申おき春早々下り候様にも頼入候。以上。

春と申ては来春の用には立申まじく候。味そを御くだし候のよし祝申候。はやく来れかしと存候。以上。

押つめ候は、三方も遣し可申候へども此節はまだまだより無之弥如此に候ま、御身遣候。嗚々当暮心遣察入きのどくに候へども無是非候。以上。

当月十一日出之御状相届弥御無事厳寒被凌力千代も致成長候由大慶に候。お磯正月臨月之由候。其間折節患候由。寂前も懐胎之間時患被申候由寛申候。左候は、却而安産と存候。足袋二足御越候。よく御礼頼入候。我等も秋中痰気には候へども惣躰は随分違者にて顔色

等当年はいかふ丈夫にみえ候由人々申候而一日も臥候ほどの事は無之候。併当夏以来御用甚重り日夜に宿に而も考物等いたし一円無寸暇候而日々之様に存候へば書状不遣候。寂前之御状も相届致承知候。一此間御納戸払少々拝領仕候。又小次郎様之御召ふるしも一つ被下候間力千代へ遣候。冥加之為いた、かせ候而正月御させ可有之候。飛脚便に而此度遣候。

衛士

市左衛門殿



■小次郎様とは
田安宗武長子、
宝暦三年歿。二
俣炭取寄せの依
頼も江戸在住日
の浅いことを示
す。田藩出仕間
もないころのも
のか。
(渡辺守邦)

国文学研究資料館評議員名簿

- 麻生 磯次 (学習院名誉院長)
- 石井 良助 (東京大学名誉教授)
- 臼田 其五郎 (国学院大学教授)
- 大久保 利謙
- 児玉 幸多 (学習院大学長)
- 小葉田 淳 (京都大学名誉教授)
- 小林 清治 (福島大学教授)
- 佐々木 八郎 (早稲田大学名誉教授)
- 齊藤 正 (東京国立博物館長)
- 佐藤 喜代治 (東北大学名誉教授)
- 鈴木 忠直 (日本近代文学館専務理事)
- 手塚 富雄 (東京大学名誉教授)
- 豊田 武 (東北大学名誉教授)
- 中村 幸彦 (関西大学教授)
- 野間 光辰 (京都大学名誉教授)
- 秀村 選三 (九州大学教授)
- 古島 敏雄 (東京大学名誉教授)
- 宝月 圭吾 (東京大学名誉教授)
- 松尾 聰 (学習院大学教授)
- 山岸 徳平 (東京教育大学名誉教授)

昭和五十二年度

国文学文献資料収集計画委員名簿

- 秋山 虔 (東京大学教授)
- 今井 源衛 (九州大学教授)
- 尾形 仂 (成城大学教授)
- 金子 金治郎 (東海大学教授)
- 後藤 重郎 (名古屋大学教授)

国文学文献資料調査員名簿

- 小松 茂美 (東京国立博物館美術課長)
- 阪倉 篤義 (京都大学教授)
- 鈴木 栄三 (白梅学園短期大学教授)
- 浜田 義一郎 (大妻女子大学教授)
- 益川 勝実 (法政大学教授)
- 昭和五十二年度
- 文献目録委員会委員名簿
- 浅井 清 (お茶の水女子大学教授)
- 大矢 武師 (文部省教科調査官)
- 久保田 淳 (東京大学助教)
- 篠原 昭二 (東京大学助教)
- 瀬戸 仁 (文部省教科調査官)
- 曾倉 岑 (青山学院大学助教)
- 浜野 卓也 (東京都立上野高等学校定時制教頭)
- 山口 明徳 (東京大学助教)
- 杉本 邦子 (昭和女子大学助教)
- 昭和五十二年度
- 情報検索委員会委員名簿
- 石綿 敏雄 (茨城大学教授)
- 稲岡 耕二 (東京大学教授)
- 小田 泰正 (国立国会図書館司書監)
- 桜井 宣隆 (図書館短期大学教授)
- 西村 恕彦 (工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)
- 堀内 秀晃 (東京医科歯科大学教授)
- 水谷 静夫 (東京女子大学教授)
- 山本 毅雄 (東京大学助教)

国文学文献資料調査員名簿

- (北海道・東北)
- 伊藤 敬 (藤女子短期大学教授)
- 井上 隆明 (秋田経済大学教授)
- 片野 達郎 (東北大学教授)
- 金沢 規雄 (宮城教育大学教授)
- 田中 隆昭 (宮城学院女子大学助教)
- 橋本 朝生 (山形大学講師)
- 原田 貞義 (岩手大学助教)
- 松野 陽一 (東北大学教授)
- (関東)
- 有川 美亀男 (群馬大学教授)
- 江本 裕 (文部省教科書調査官)
- 小笠原 恭子 (武蔵大学教授)
- 岡野 道夫 (日本大学助教)
- 片桐 登 (法政大学助教)
- 小池 正胤 (東京学芸大学助教)
- 杉谷 寿郎 (日本大学教授)
- 徳田 武 (明治大学専任講師)
- 栃木 孝惟 (千葉大学助教)
- 外村 南都子 (白百合女子大学助教)
- 長尾 高明 (宇都宮大学助教)
- 中山 石尚 (共立女子短期大学専任講師)
- 林 雅彦 (学習院女子短期大学助教)
- 原 道生 (横浜国立大学助教)
- 半田 公平 (二松学舎大学専任講師)
- 平田 喜信 (横浜国立大学教授)
- 森川 昭 (東京大学助教)
- 和田 英道 (跡見学園女子大学専任講師)
- (中部)

上條 彰次(静岡女子大学助教授)
 北岡 四良(皇学館大学教授)
 久保木 哲夫(都留文科大学教授)
 黒川 昌亨(三重大学教授)
 佐藤 彰(静岡女子短期大学教授)
 沢井 耐三(愛知大学助教授)
 島津 忠夫(愛知県立女子短期大学教授)
 鈴木 勝忠(岐阜大学教授)
 田口 和夫(静岡英和女学院短期大学助教授)
 田中 新一(愛知教育大学教授)
 浜 森太郎(三重大学助手)
 西 一祥(日本大学短期大学部助教授)
 増田 欣(富山大学教授)
 森 正人(愛知県立大学講師)
 山下 宏明(名古屋大学助教授)
 (近畿)
 池上 洵一(神戸大学助教授)
 今西 實(天理大学教授)
 片山 享(甲南女子大学教授)
 加納 重文(平安博物館講師)
 雲英 末雄(大阪女子大学助教授)
 阪口 弘之(大阪市立大学講師)
 笹川 祥生(京都府立大学女子短期大学部助教授)
 服部 幸造(大阪府立大学講師)
 松平 進(梅花女子大学助教授)
 松原 秀江(姫路短期大学講師)
 真鍋 昌弘(関西外国語大学助教授)
 水田 紀久(関西大学教授)
 村瀬 憲夫(和歌山大学講師)

(中国・四国)
 赤羽 学(岡山大学教授)
 位藤 邦生(広島大学講師)
 小泉 道(愛媛大学教授)
 佐藤 恒雄(香川大学教授)
 曾田 文雄(島根大学教授)
 竹本 宏夫(下関市立大学教授)
 徳満 澄雄(高知女子大学助教授)
 原水 民樹(徳島大学講師)
 美山 靖(愛媛大学助教授)
 湯之上 早苗(広島文教女子大学短期大学部助教授)
 米谷 巖(広島大学助教授)
 (九州)
 江口 正弘(熊本女子大学助教授)
 大内 初夫(鹿児島大学教授)
 小島 環禮(琉球大学助教授)
 重松 裕己(熊本女子大学助教授)
 中野 三敏(九州大学助教授)
 米倉 利昭(佐賀大学教授)
 若木 太一(長崎大学助教授)
 人事異動
 (昭和五十二年三月、同五十二年七月)
 (採用)
 昭和五十二年四月一日付
 文部教官(文献資料部助教授) 渡邊 守邦
 文部教官(文献資料部助手) 高田 信敬
 文部教官(研究情報部助手) 和田 博通
 文部教官(史料館助手) 安藤 正人

(転入)
 管理部会計課長 柴田 一男
 (文部省より)
 (転出)
 昭和五十二年四月一日付
 文献資料部助教授 日野 龍夫
 (京都大学へ出向)
 管理部会計課長 石塚 忠雄
 (東京医科歯科大学へ出向)
 (辞職)
 昭和五十二年三月三十一日付
 文献資料部助手 加藤 定彦
 (四月一日立教大学就職)
 研究情報部助手 岩下 武彦
 (四月一日名古屋学院大学就職)
 史料館長 鈴木 寿
 (東京家政学院大学就職)
 (併任)
 昭和五十二年六月一日付
 文部教官(文献資料部教授) 小山 弘志
 (東京大学より)
 文部教官(文献資料部助教授) 信多 純一
 (大阪大学より)
 (雇用)
 昭和五十二年六月一日、
 昭和五十二年十一月三十日
 外国人研究員 ドナルド・キーン
 (コロンビア大学教授)

文献資料部事業報告

大久保 正

当館もいよいよ本年六月二十四日

に開館式典を挙行、七月二十五日から閲覧・利用の業務を開始して今日に至ったが、当部としてもますます責任の重さを痛感している。ここに昭和五十二年一月一日以降、六月末日までに当部で行なってきた事業の概要を報告する。

文献資料収集の概況

昭和五十一年十二月末日までに、調査員の協力を得て収集したマイクロフィルム資料の概要は、既に前号で報告したが、その後昭和五十二年三月末日までに、さらに左記資料を追加収集した。本年四月以降も、鋭意収集に努力中で、すでに十近くの図書館・文庫を数えるが、これについては次号に改めて報告する。

- 1 中野莊次氏所蔵友山文庫
 - 「竹とりのおきな」ほか三二点。
 - 2 篠山鳳鳴高校青山文庫
 - 「八幡愚童訓」ほか一〇二点。
 - 3 桑名市立文化美術館秋山文庫
 - 「義経記」ほか一四九点。
- 昭和五十二年国文学文献資料収集

計画委員の委嘱について

本年度の収集計画委員として、再任五名、新任五名、計十名の方々に委嘱し、四月一日付をもって発令された。(別紙名簿参照)

昭和五十二年国文学文献資料調査員の委嘱について

本年度文献資料調査員として、北海道・東北地区八名、関東地区十八名、中部地区十五名、近畿地区十三名、中国・四国地区十一名、九州地区七名、計七十二名の方々(別紙名簿参照)を委嘱した。ほかに特別調査員九名を委嘱し、特定事項について調査・収集に御協力いただくこととした。

国文学文献資料収集計画委員会の開催

五月六日、当館会議室において開催、本年度の調査収集計画について説明し、意見を交換し、種々有益な助言をいただいた。特に国内のみならず、海外の文献資料収集についても努力してほしいとの要望があった。国文学文献資料調査員会議(総会)

の開催

五月十二日、当館大会議室において開催した。その次第を左に掲げる。

- 一、開会の辞
- 二、館長あいさつ
- 三、議事

(1) 昭和五十二年度文献資料調査員委嘱について

(2) 昭和五十一年度までの文献資料調査収集結果について

(3) 昭和五十二年度文献資料調査員集計画について

(4) 当館からの要望

四、研究情報部長あいさつ

五、国文学文献資料調査要領の説明

六、地区別打合せ

七、特別講演「古筆切について」

八、閉会の辞

東京国立博物館学芸部美術課長 小松茂美

小松博士の講演は、貴重な古筆切数点を展示されて、実物に即しながら具体的に古筆切の諸問題を論述しつつ、その古筆学の構想を明らかにされ、学術的香気に満ちた名講演で、一同に多大な感銘を与えた。

本会議の資料として配布した「国文学文献資料調査要領」は本年度再訂を加えたものである。また、別に

業務用として作成した「国文学文献資料既調査文庫目録」を配布したが、これは当部が調査員の協力を得て過去五年間行なってきた足跡を示したものである。

文献資料部第四室の開設

古代・中世・近世の時代別に組織されている当部三室の調査研究及び収集を、演劇・歌謡その他のジャンルの面から補強するため、第四室の開設を要求していたが、このたびその各員定員が認められ、本年度は東京大学教授小山弘志、大阪大学助教授信多純一の両名が併任することとなり、六月一日付で発令された。

国文学文献資料調査報告書の作成 当部の部内業務用として、昭和五十一年度調査員の調査報告に基づく「国文学文献資料所在調査目録・昭和五十一年度」を、本年六月に作成刊行した。

研究情報部事業報告

古川 清彦

昭和四十七年五月の創設以来五年余の準備段階を経た当館は本年七月二十五日(月)からいよいよ閲覧事務を開始した。「資料利用案内」も作られ、種々の利用者・見学者を迎えて、共同利用機関としての機能が發揮されようとしている。

以下、各室毎に事業と状況を報告したい。

(1)情報室。情報室では前年度に引き続き各新聞から国文学関係の情報を収集・整理するとともに、昨年末から行なってきた国文学関係者の資料のファイル化の作業を完了した。現在一層の充実をめざして補足作業を行なっている。また当室では本年十一月十日・十一日に当館で開催される国際日本文学研究集会の事務を担当して準備を行なっている。(ちなみにドナルド・キーン氏が外国人研究員として六月から十一月まで在任中である。)

(2)整理閲覧室。マイクロフィルム・図書・逐次刊行物の整理に一応のまとまりをつけて開館と利用開始に臨

んだ。マイクロフィルムについては

「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録」、逐次刊行物については「同逐次刊行物目録」を刊行したが、いずれも電算機処理による。本年度から委員会の組織が変り、図書資料委員

会の下にマイクロ室運営委員会・図書選定小委員会・貴重書指定小委員

会がつくられ、当室がそれらの事務を担当して、整理・閲覧に関する内

規の検討、各種の書式の作成、今年度の購入図書選定計画、基本図書リ

スト作成を進めている。また国立教育研究所からの移管本(国学者自筆

稿本を主とする)を受入れ、久松潜一旧蔵本(中世歌論書)等を寄託図

書として整理保管している。なお四月一日付で本田室長が教授に昇任し、

杉山重行助教(昇任)が文献資料部から整理閲覧室に移り、島原泰雄助手

が文献資料部に配置換えとなり、内藤英雄事務官が閲覧係長に昇任した。

また、五月二十日付で加藤節子事務官が着任し、七月十日には永田治樹

整理係長が文部省在外研究員として

ロンドン大学に留学(十ヵ月)のため出発した。

(3)編集室。前年度に引き続き「国文学研究文献目録」の昭和五十年版、

五十一年版、五十二年版の三つの目録を並行して編集中であり、五十年

版は本年度中に刊行予定である。なお、三月三十一日付で岩下武彦助手が辞

職し、その後任として和田博通助手が着任した。

(4)参考室。参考開架閲覧室に参考用図書を別置し、同室の整備、開館

後の参考業務のシステムを検討している。また展示委員会の事務を担当

し、「国文学研究資料館開館特別展示——国学者自筆稿本と奈良絵本を中心として——」を企画実施した。(六月二十四日開館式当日および七月二十五日・同三十日。)なお七月一日付

で藤沢美智子事務官が情報処理室から当室へ配置転換となった。

(5)情報処理室。

(1)整理閲覧室で整理の行なわれた八九

三一点のマイクロ資料データを磁気テープに入力し、本年一月から校正

・編集の処理を行なって前掲のマイクロ資料の目録(A4版、基本目録八

〇二頁、著者索引四四頁、書名一記

載題名一索引二三〇頁)の版下を作製し、開館に備えて印刷を行なった。

(2)当館所蔵の逐次刊行物一三三二タイトルについても、データの入力・校正・編集・版下作製・印刷を行なった。

(3)昭和五十二年度予算に電子計算機および漢字システムの導入が認められたので、ただちに数社に提案書の

提出を求め、三月二十九日情報検索委員会を開いて、ハイタックM一六

〇IIおよび同社の漢字システムを採用することに決定し、四月以降導入

の準備を開始している。

(4)当館に導入する漢字システムで使用する漢字の選定について、昭和五

十年以来漢字字種選定委員会(委員長西尾光一氏)で検討を行なってきた

が、日本工業規格(JIS)案を基礎とし、これに必要な文字を順

次追加する趣旨の答申が行なわれた。

※昨年度に引き続き、科学研究費特定研究「情報システムの形成過程と

学術情報の組織化」に参加し、また今年度から新たに発足した言語の特

定研究に「日本語の文字システムにおける実用的言語処理の基礎的研究」のテーマで参加することになった。

※マイクロ室。本年度の主な計画は、

(1)五十一年度に取り集したマイクロ写真フィルム(一〇八〇リール、約六四〇〇点)を処理して従来通り外注

によって第二ネガフィルムを作り、閲覧用ポジフィルムを館内（今年度から一部外注）作製して閲覧に供する。(2)また資料の閲覧・利用の便を企つて五十年度収集資料の中から約一〇〇〇点の紙焼写真本を外注により作製する。(3)開館にともなつて、当館所蔵の原本（貴重書約三〇〇〇点を含む約三〇〇〇点）の利用上、主に複写依頼に依るため、当館内マイクログラフ室で約三五〇点の原本（主に貴重書）撮影を行なう。(4)その他第二ネガフィルム作製および紙焼製本要領、カラーフィルム撮影要領など種々検討の上、作成の予定である。ちなみに、マイクログラフ室は四月一日付で研究情報部におかれることとなり、杉山助教が主任になった。

昭和五十二年度公開講演会

東西の日記文学

大妻女子大学文学部長

吉田 精一

日本文学史について

国文学研究資料館

外国人研究員

ドナルド・キーン

十月一日(土)午後一時半から

国文学研究資料館会議室

で催され、約三〇〇名の

聴講者があつた。

国文学研究資料館評議員会議の開催

昭和五十二年五月二十日(金)、当館中会議室に於て、国文学研究資料館評議員会議(総会)が開催された。議題は左記のとおりで、山岸徳平議長はじめ十一名の評議員が出席され、当館の事業について有益な助言をいただいた。

議 題

- 一、管理運営の概況について
- 二、昭和五十二年の予算について
- 三、本年度の事業について
- 四、その他

大学外、学会・研究会一覽(I)

情報室では現在、当館に寄贈されている逐次刊行物を資料として、国語国文学会連絡協議会に加入している、大学外で活動している国語・国文学関係の学会・研究会の資料を収束している。今回は第一回アンケート回答分と、最近号の奥付により連絡先が明確なものを一覽として掲げる。学会・研究会の掲載はアイウエオ順、以下①連絡先(「東京都」は省略)②機関誌である。なお、連絡先が不明等のため、当一覽に載せなかつた学会・研究会については、おつてアンケートを発送させていたかどうかことになるが、前回のアンケート用紙がお手元に届いていない学会・研究会は連絡先を当館情報室まで御一報いただきたい。

秋田語文研究会①秋田市手形秋田大学教育学部国語国文研究室佐々木 研究室内②秋田語文

石川近代文学館鏡花研究会①金沢市 広坂二二一一三石川近代文学館 内②鏡花研究

王朝文学協会①大阪府羽野市はびきの五一一四②王朝

大阪俳文学研究会①堺市大仙町大阪

女子大学芸英末雄研究室内②大阪 俳文学研究会会報

温故学会①渋谷区東二一九一一②温故誌

金沢古典文学研究会①金沢市丸の内 一一一金沢大学教育学部原田研究室内②説話・物語論集

牛玉の会①神奈川県横須賀市湘南鷹取三一一七②三田中③近世文芸ノート

「キリスト教と文学」研究会①三鷹市大沢三一一〇②国際基督教大学人文科川研究室内③「キリスト教と文学」研究会会報

近世初期文芸研究会①世田谷区北沢二一四〇②九島本③近世初期文芸

軍記物談話会①世田谷区駒沢一一二二 三一一駒沢大学国文学研究室内②軍記と語り物

訓点語学会①京都市上京区油小路通 元哲願寺下ル中央図書館ビル三階②訓点語と訓点資料

芸術至上主義文芸研究会①千葉県市川市須和田一一二一五森安方②芸術至上主義文芸

芸能史研究会①京都市左京区岡崎円

- 勝寺町四京都観世会館内②芸能史研究
- 芸文故の会①長野市西長野一〇二六一三三山下方②芸文政
- 芸文の会①大田区久が原五一三十三田アヤ子方②芸文
- 計量国語学会①杉並区善福寺二東京女子大学三号館二一〇号室②計量国語学
- 月曜会①千代田区富士見二一七七一七松本方②能・研究と評論
- 源氏物語読書会①愛媛県松山市文京町三愛媛大学教育学部白方研究室内②源氏こぼれ草
- 高知日本文学研究会①高知市白石町三二七―五二浜田清次方②日本文学研究
- 古典遺産の会①世田谷区北沢一―四一〇矢代和夫方②古典遺産
- 古典と現代の会①埼玉県和光市諏訪原団地二一六―五〇四②古典と現代
- 駒沢平安文学研究会①千葉県松戸市高塚新田四九七―一六横井孝方②平安文学研究会会報
- 混池会①大阪市東区淡路町四―三中尾松泉堂書店内②混池
- 佐多稲子研究会①埼玉県所沢市緑町一―二三公住二九の四号長谷川隆方②くない
- 滋賀民俗学会①滋賀県大津市石山寺三―二二三②民俗文化
- 四季派研究会①品川区大崎四―一―十四風信社内②四季派研究
- 「史料と研究」同人①札幌市豊平区西岡二四三―二札幌大学高橋研究室内②史料と研究
- 大衆文学研究会①保谷市中町六一九一―六尾崎方②大衆文学研究、大衆文学研究会紀要
- 太平記研究会①新宿区西早稲田一―六一一早稲田大学教育学部梶原研究室内②太平記研究
- 高村光太郎研究会①埼玉県草加市永川町一七九―一請川利夫方②高村光太郎研究
- 太宰文学研究会①世田谷区奥沢三―三〇―一八長篠康一郎方②太宰治の人と芸術
- 伝承文学研究会①杉並区高円寺南三―一〇―九メゾン・ド・ポアA徳田方②伝承文学研究
- 東海近代文学会①名古屋市中種区桜ヶ丘一愛知淑徳短期大学内
- 東京手紙の会①千代田区神田神保町一―五五波多野幸彦方②書状研究
- 中国国中世文学研究会①岡山市玉柏二〇六六一―二稲田方②中世文学研
- 世文学研究
- 長野県国語国文学会①長野県上伊那郡長野町辰野高校内②長野県国語国文学会会報
- 南都仏教研究会①奈良市雑司町東大寺教学部内②南都仏教
- 西日本国語国文学会①福岡市東区箱崎六一一九―一九九州大学国文学研究室内②西日本国語国文学会会報
- 日本比較文学会①渋谷区渋谷青山学院大学八号館八階小玉研究室内②比較文学
- 日本文学研究会①文京区関口一―一五株式会社文理内②文学研究
- 日本文芸研究会①府中市柴町二―一一久保稔方②日本文芸論攻
- 日本方言研究会①北区西が丘三―一九一四国立国語研究所気付②発表原稿集
- 俳文芸研究会①文京区大塚二―一―一お茶の水女子大学国文学研究室内②俳文芸
- 萩原朔太郎研究会①群馬県前橋市大手町二―二一九前橋市立図書館内②萩原朔太郎研究会会報
- 半田万葉会①愛知県半田市乙川太田町二―五七杉浦茂光方②半田万葉会報
- 広島民俗学会①広島市宇品東一―一―一七―一広島女子大学内②広島民俗「文芸と批評」の会①新宿区戸山町42早稲田大学文学部五六六研究室内
- ②文芸と批評
- 平安文学研究会①京都市右京区竜安寺御陵ノ下町四―三田中重太郎方②平安文学研究
- ミメーシス同人①埼玉県川口市市川口四―一―二二―一〇九石黒方②ミメーシス
- 普話伝説研究会①渋谷区東四―一―〇二八国学院大学日本文学第二研究室内②普話伝説研究
- 紫式部学会①横浜市鶴見区鶴見二―一―一三鶴見大学文学部日本文学科研究室内②むらさき
- ◇編集後記◇
- ▼今回は発行が若干おくれましたが開館後の最初の号として、開館の写真集や、春の調査員会議の際講演されました。小松茂美東京国立博物館美術課長の「古筆」を掲載し、増頁いたしました。
- ▼開館の際の特別展示「国学者自筆稿本と奈良絵本」にも多数の来館者があり、新しい建物で行う初の公開講演会には、三〇〇人以上が来館され、広い会場一ぱいの盛況でした。

昭和五十二年秋季学会開催一覽

国語国文学会連絡協議会に参加する各学会の秋季大会は、次のとおりである。学会提出はアイウエオ順、以下①事務局(「東京都」は省略)②大会開催日③会場、の順。

- 解釈学会①豊島区北大塚三二九一 二②予定なし
- 近代語学会①世田谷区太子堂一一七 昭和女子大学内②十二月三日③昭和女子大学温考館
- 国語学会①千代田区神田錦町三一二 武蔵野書院内②一〇月八、九日③秋田大学
- 古事記学会①千葉県市川市国府台二 一八一三東京医科歯科大学歴史学 研究室内②予定なし
- 古代文学会①世田谷区千歳台六一八 一八三浦佑之方②予定なし
- 上代文学会①杉並区永福一一九一一 明治大学和泉校舎大久間研究室内 ②予定なし
- 脱話文学会①埼玉県上尾市戸崎八一 女子聖学院短期大学内②予定なし
- 全国大学国語国文学会①文京区目白 台二一一八一一日本女子大学文学部 国文学科研究室内②一〇月一五、 一七日③奈良教育大学

中古文学会①京都市上京区今出川通 烏丸東入新北小路町同志社大学文 学部国文学研究室内②一〇月二九 一三一日③太宰府天満宮

- 中世文学会①港区三田二一一一五〇四 五慶応大学文学部国文学研究室内 ②一一月一二、一四日③山梨大学 日本演劇学会①新宿区西早稲田一一 六一一早稲田大学演劇博物館内
- 日本歌謡学会①渋谷区東四一一〇一 二八国学院大学文学部内②一一月 一八、一九日③沖縄国際大学
- 日本近世文学会①豊島区西池袋三一 三四立教大学日本文学研究室内② 一一月一二、一三日③関西大学
- 日本近代文学会①千代田区三番町一 二大妻女子大学国文学研究室内② 一〇月一五、一六日③甲南女子大 学
- 日本口承文芸学会①渋谷区東四一一 〇一一八国学院大学文学部白田研 究室内
- 日本文学協会①豊島区南大塚二一一 七一一〇日本文学協会②一一月一 二、一三日③成城大学
- 日本文学風土学会①世田谷区太子堂 一一七昭和女子大学国文学研究室

1st International Conference on Japanese Literature in Japan
National Institute of Japanese Literature
Tokyo, Nov. 10th, 11th, 1977
第1回国際日本文学研究集会
とき 昭和52年11月10日(木)、11日(金)
ところ 国文学研究資料館

主催 国際日本文学研究集会組織委員会(委員長 国文学研究資料館長 市古貞次)
支援団体 日本学術振興会(Japan Society for Promotion of Science, JSPS)

11月10日
特別講演
「狂言と現代との接点」
リチャード・マキノン(ワシントン大学教授)
「日本におけるモダニズム作家について」
ドナルド・キーン(国文学研究資料館外国人研究員・コロンビア大学教授)

研究発表
座長: 池田 重(千葉大学教授) 長谷川 泉(学習院大学講師)
「古今集への影響と古今集からの影響」
ニコラス・ティール(京波大学講師)
「西洋から見た日本の女流日記文学の伝統」
キャサリン・プロデリック(神戸女学院大学助教授)
「文学研究の中核概念としての「文学」および「作品」」
坂野 信 彦(中央大学助教授)
「夏目漱石の言語の使用から生ずる翻訳上の諸問題」
アラン・ターニー(清泉女子大学教授)
「新散文詩」について
デニス・キーン(日本女子大学教授)

レセプション(ホール)
11月11日
書院部見学: 国文学関係古写本等
裏千家家元東京出張所: 茶の湯
国立劇場演劇観賞: 和田勝一作「海援隊」4幕 中村吉右衛門ほか

- 内②一一月二六日③昭和女子大学 日本文芸研究会①宮城県仙台市川内 東北大学文学部国文学研究室内② 一一月一二日③東北大学文学部
- 日本文学部国文学科研究室内 ②一〇月一、三日③岩手大学教育 学部
- 表現学会①愛知県豊田市長久手町長 湊片平愛知淑徳大学国文学科研 究室内②予定なし
- 仏教文学研究会①保谷市新町一一一 武蔵野女子大学国文学研究室内② 予定なし
- 万葉学会①大阪府吹田市千里山東三 丁目関西大学文学部国文学研究室 内②一〇月一、三日③武庫川女子 大学
- 美夫君志会①名古屋市中昭和区八重本 町一〇一一二中央大学文学部国文 学研究室内②予定なし
- 和歌文学会①新宿区戸山町四一早稲 田大学文学部藤平・上野研究室内 ②一〇月二九、三一日③太宰府天 満宮

国文学研究資料館報 第九号
昭和五十二年一〇月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一六一二〇
郵便番号 一四二
電話(七八五)七二二(代)
印刷所 秀英堂紙工印刷機